慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「鼻」学について
Sub Title	Du nez-sthètique
Author	荻野, 安奈(Ogino, Anna)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.2 (2011. 12) ,p.195(62)- 210(47)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	牛場暁夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010002-0210

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「鼻」学について

荻野　安奈

1. クレオパスカル

パスカル（1623年－1662年）ほど、うろ覚えで引用される作家はない。死後刊行の『パンセ』（1670年初版）は未完の断片の集合体となった。そのためか、気のきいた一行を会話に挟むのに適している。「天才的なコピーライター」[1]としての側面を持つパスカルは、今でも決め台詞の宝庫たりえている。

中曽根康弘氏と数年前に対談の機会があり、氏は明確なフランス語でこう言った。

> « L'homme est un roseau pensant ».
>
> 人間は考える葦である。

氏は旧制高校時代の第二外国語がフランス語で、パスカルは辞書を引きながら三分の一ほど自主的に訳したことがあるという。以来、私は学生にハッパをかけている。若き仏文が老政治家に負けるな、と。

中曽根氏の引用した部分の、原文は若干異なる。

> « L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant »[2].
>
> 人間は一本の葦に過ぎず、自然界で一番ひ弱だ。しかし、それは考える葦である。

人間の定義に葦という具体性を組み込むのがパスカル流で、当時の人々には、川辺の葦は日常の情景の一部であったはずだ。パスカルがもし現代に生きていたら、いかなる比喩を用いただろうか。「人間は（　　）にしか過ぎない」の括弧の中を学生たちに埋めてもらったことがある。「消しゴム」という答えが記憶にあるのは、すり減っていく儚さが表現されていたからか。

「考える葦」と同じぐらい頻繁に引用されるのが「クレオパトラの鼻」である。通常「クレオパトラの鼻がもう少し低かったら、歴史が変わっていただろう」といった使われ方をする。むろん原文とはズレがある。

> « Le nez de Cléopâtre, s'il eût été plus court, toute la face de la terre aurait changé »[3].
>
> クレオパトラの鼻。これがもうちょい寸足らずなら、地球の顔がすっかり変わっていたはずだ。

「地球の顔」としたところは、既訳では「大地の全表面」（前田陽一）や「地の全面」（由木康）とある。« face » は人間なら「顔」、地面なら「表面」だが、「鼻」のあとに来たそれは、人間というミクロコスモスの顔と、世界というマクロコスモスの顔、二つの対比を意図していたとしても不思議ではない。

鼻に付けられた形容詞 « court » は、直訳すれば「短い」。「短い鼻」は日本人に馴染まないため、大抵は「低い」と訳される。西欧の場合、鼻はある程度高くて当たり前で、美の規範は他所に求められる。あえて洋風の短い鼻を想像してみよう。いわゆる鼻の下が長くなり、いかついゴリラの印象になる。

低い鼻なら整形で修正可能な現代でも、長さばかりは手の施しようがない。他のパーツが整っていればいるほど、短かさの不備は目立つはずだ。そこに着眼したパスカルは修辞学の名手である。納得した上で残る疑問が

二つある。

その一、何故目や口ではなく鼻なのか。

その二、何故他の美女ではなくクレオパトラなのか。

答えはすでに存在する。田辺保のパスカル論には、その名も「クレオパトラの鼻」という章がある。田辺は「口や目が、鼻に比べると、あまりにも『ものをいいすぎる』」[4]と看過した。目は眼差しで、口は言葉で自己表現できるが、鼻は寡黙な分「一種の宿命性」を感じさせる。

次にクレオパトラだが、彼女は当時の劇や小説に馴染みのヒロインだった。複数の作家が取り上げているなかで、パスカルに関係があるのはコルネイユである。先ほど引用した「鼻」の原文は、「葦」同様、一つの断章の一部を成している。全体を改めて引用する。

> 人間の空しさを知りつくしたいなら、恋愛の原因と結果をきっちり把握するしかない。原因は「何だか分からないもの」(コルネイユ)。その結果、とんでもないことになる。この「何だか分からないもの」、気が付かないほど些細なものが、地上全体、王侯も軍隊も、全世界を揺るがすのだ。
>
> クレオパトラの鼻。これがもうちょい寸足らずなら、地球の顔がすっかり変わっていたはずだ[5]。

コルネイユがパスカル家に出入りしていたこと、「何だか分からないもの」がコルネイユ得意の台詞であること、彼の『ポンペーの死』にクレオパトラが登場すること、全て田辺が指摘している[6]。

その上で、クレオパトラ本人に興味が湧いた。一般に、美人説と同じぐらい不美人説も流通している。実は大した美貌ではなかった、という説はプルタルコスの『英雄伝』にすでに見受けられる。プルタルコスはローマ側の人間であり、カエサルとアントニウスという二大英雄を次々と手玉に取ったエジプト女(ただし出自はギリシャ人)に対する偏見はあって当然である。クレオパトラとアントニウスの出会いも、冷徹な視点で描かれて

いる。

（略）クレオパトラはアントニウスが全くの兵隊で下賤なことを見抜き、この人に対して既に容赦なく露骨にそういう態度を取った。現に、人々の言うところでは、クレオパトラの美もそれだけでは一向比較を絶するものではなく見る人を驚かす程のものでもなかったが、交際振りに相手を逃さない魅力があり、その容姿が会話の説得力と一座の人々にいつの間にか浸み渡る性格とを兼ね備え、針のように心を打った[7]。

魅力の具体例として、プルタルコスは声の美しさと、数カ国語を操る才能を挙げている。「何だか分からないもの」は目鼻の位置や大きさではなく、オーラとして滲み出るある種の才智であり、クレオパトラの場合は相手を「見抜き」、演出していたと分かる。

英雄と女王の最期を描くプルタルコスの筆は容赦ない。陸戦の得意なアントニウスは女王に引きずられてアクティウムの海戦に突入し、女王側がいち早く戦線離脱したのをアントニウスが追って敗戦を喫した。彼の怒りを恐れて、クレオパトラ死亡説を流させたのは女王本人。結果アントニウスは自殺、とあっては、美女というより悪女である。

16世紀の学芸復興を経たギリシャ・ローマ趣味が17世紀、古典主義として開花する。当時のクレオパトラ人気はローマ色の強いもので[8]、ローマの素材を多く用いたコルネイユもまたローマの歴史家[9]の視点を共有していた。

歴史をよく検討すると、女王は愛のない野心しか持たず、策略として美貌のもたらす利点を用い、自分の立場をよくしたと思われる[10]。

このような視点のもとに描かれたクレオパトラは、作中でもカエサルの離婚を望み、自分が「世界の女主人」たることを夢見る。

クレオパトラ

運がよければ私はうまく彼［カエサル］を引きとめられるかも。

(略)

私には野心があるの、良きにつけ悪しきにつけ、

私の心はその重みで打倒されたがっている、

野心の熱が好き、いつだって私にとっては

野心こそが女王にふさわしい唯一の情熱[11]。

コルネイユ版クレオパトラを前にして、パスカル版クレオパトラの「鼻」に違和感を覚えるのは私だけだろうか。彼女の側から世界を見れば、カエサルもアントニウスも、野心家の甘言に踊らされたに過ぎない。従って「何だか分からないもの」は、カエサルたちの側にのみ存在する。

パスカルがリアリストなら、人間の空しさを証明するにあたり、恋愛ではなく野心の「原因と結果」について述べたはずだ。クレオパトラの野心がもう少し抑制されていたら……。そうなると「鼻」の出番がなくなる。「鼻」を文学と置き換えてもよい。むしろそれだけの重みをこの比喩が担っていることを、コルネイユが反面教師的に教えてくれた。

何故クレオパトラか、は突き詰めて本質に至る問いかけではないと分かった。何故「鼻」なのか、という原点にたち戻ってみたい。

2. 鼻ブラゾン

パスカルの17世紀から少し遡る。よっぱらいの赤鼻では喜劇になるから、あえて喜劇とは別のジャンルに例を取る。「ブラゾン」の本来の意味は「紋章」で、16世紀には詩のジャンルの呼称でもあった。ある一つの対象を徹頭徹尾、褒めて（あるいは貶して）みせる描写詩である[12]。クレマン・マロの「美しい乳房のブラゾン」を嚆矢とし、時代の詩人たちがこぞって女体のパーツを謳った。実質的には歌会であり、優勝したのはモーリス・セーヴの「眉」だった。やがて『女体のブラゾン』（1536年）として出版

された。

むろん「鼻」のブラゾンも存在する。作者のユストルグ・ド・ボーリュー（？－1570年頃）はリモージュ出身で、音楽家から牧師に転身し、詩集も残している。ブラゾンの歌会では、他に「歯」や「尻」なども担当。以下に彼の「鼻」の全文を訳出しておく。

かわいい、すてきな、きれいなお鼻、
長くも、短くもなく、ちょうどよい、
美人の条件といえばコレ、
お鼻ちゃんの名誉のために、言わせてもらう
君が顔にあるかないか、それだけで
全身がきれいかブスか決まっちゃう。
すごいよね？ねぇ、ちびまる鼻ちゃん、
ちびでも良い子、きれいで立派、
すごいよね、君、君そのものが。
まったくもって、この世に会話、
おしゃべり、笑いがあるのも、キスしたり迫ったりの
お楽しみがあるのも、君の参加があってこそ。
ねぇ、出来のいい、つんと高いお鼻ちゃん、
だから君がつべこべ言われる理由はない。
すじの通った、優美なお鼻、
君はお顔のまん中に居て、
全身のパーツをリフレッシュしてくれる、
やさしい、薫る、そよ風の鼻風で。
だから、君には今いる場所がふさわしい、
他のどのパーツよりも明白な権利がある。
潰れずペチャンコでなく、デカくもゴツくもない鼻
つまり程よい、かわいい、シュッとしたお鼻。
バルサムよりも百倍もいい匂いの鼻、

その香りは（僕が彼女のそばにいる時）
僕の五感を呼び覚ます、
教会のお香よりよほどきくんだ。
鼻よ、君の息はとてもすばらしい香りだから、
アンバーも麝香も君に比べたら糞だ。
君は、くたばりかけたり死んだも同然の
人々の命を吹き返させる。
鼻よ、君の匂いは比べるものとてない、
鼻よ、君は香炉だ、妊婦のきつけ薬だ
鼻よ、君はよきものを追うが、逃げる時は逃げる
悪しき、無用な、臭いものから。
鼻水や鼻血でグズグズ、ダラダラじゃない鼻、
その人のすべてを飾り立てる鼻よ。
ツンツンでも、わし鼻でも、めり込んでもいない鼻、
寸詰まりでも、臭鼻症でも、肉薄やシワシワでもなく、
結論としては、おお鼻よ、肝心な点だが、
女は、おまえ無しでは、お猿さんに似ている。
女だけじゃない。そうさ、早い話が
あらゆる男もまた、おまえ無しではお猿さんみたいだ。[13]

鼻の長所と欠点を羅列した詩の、冒頭二行目にして、すでに鼻の長短が問題になっている。パスカルが鼻の長短を美醜の基準にしたのと同じ視線が、ここには見られる。同時に、鼻を賛美し続けることの困難を、この詩の、特に後半部分が示している。鼻が顔の中心に陣取っているのは、鼻息で全身をリフレッシュするため、というのは詭弁としてもいささか強引にすぎる。[14]

そこまで書いてしまった詩人に、もはや怖いものはない。良い匂いを嗅ぐのは鼻の機能であって、鼻自体が芳香を放つ訳ではない。ところが開き直った詩人は、実存と機能をあえて混乱させ、「香炉」のような鼻、バルサ

ムよりもアンバーよりも「いい匂いの鼻」について敷衍する。そのあとでようやく「臭いものから」逃げる鼻、つまり嗅ぐ機能に言及するが、取って付けた感を免れない。男も女も鼻がなければお猿さん、という結論は、正統派の賛美から始まった詩がパラドックスに収斂したことを読者に知らせる。

ブラゾン自体、毀誉と褒貶、両方の可能性を持つことはすでに見た。実際マロも「美しい乳房のブラゾン」のあとで、「醜い乳房」の反ブラゾンをつくっている。だが、ブラゾンのはずの一作品が途中から力つきて反ブラゾンで終わるのは珍しい。同じ作者の他のブラゾンと比べても、「鼻」には独自の諧謔精神が感じられる。

芥川龍之介やゴーゴリを引かずとも、上記のブラゾン一つで、素材としての鼻に力があると分かる。人間は鼻がなければ猿だが、目立ちすぎる鼻をつけたとたん、道化になる。クレオパトラにピエロの鼻をつけたのはパスカルの天才としても、ピエロの鼻自体はより長い伝統の産物である。

伝統を背負って立つ、鼻がらみの天才をもう一人挙げる。アベル・ルフランを援用しつつ渡辺一夫が指摘したように[15]、ラブレー（1483年？－1553年）は鼻にこだわる作家であった。初期に用いたペンネームのアルコフリバス・ナジエ（Nasier）には、ラテン語の nasus（鼻）が透けて見える。そもそも作者が「鼻田」さんなのである。

前期作品では、主人公ガルガンチュアとパンタグリュエルはその巨人性を強調するのみだが、重要な作中人物（ジャン修道士とパニュルジュ）の肖像は、いずれも鼻への言及がある。後期作品には、「山羊野鼻男（ナズドカーブル）」や「鼻欠島（エナザン）」が存在する。鼻はラブレーという全体に、水玉模様を描いて遍在する。ただし作中にブラゾンを形成するに至らない、という事実が、ラブレー読みにとっては意味を持つ。

この作家には、一章まるごと物語を中断し、羅列や一覧表を挿入する癖がある。滑稽な人名、架空の本の題名、タマキン、料理、有毒動物……アホの「ブラゾン」や怪物の「解剖」も含まれている。西欧文学の「解剖」（anatomie）は「分析」の意だが、医学の解剖を意識して羅列のかたちを取

る例が多い。

ラブレーの場合、羅列という塊で提示される主題は、作品の芯に食い込むものばかりである。たとえば架空の本の題名(『第二の書　パンタグリュエル』第7章）は、『ぴんぴんフンドシ法規』や『玉玉神学』[16]など神学書・法律書の体裁を取っており、煩瑣な専門書のパロディになっている。ばかばかしいタイトルが140冊近く列挙されるだけで、章ぜんたいが風刺の空間になる。

『天然アホ』や『教皇アホ』から意味不明の『金銀象嵌アホ』まで、幅広いアホの羅列（『第三の書　パンタグリュエル』第38章）[17]は「ブラゾン」と明記されている。毀誉と褒貶の領域、すなわちレトリックにおける演説的弁論[18]に相当すると読者に告げているのだ。レトリックを持ちだしたのは、ラブレーの心の師、エラスムスの『痴愚神礼讃』を想起するためで、エラスムスはアホの女神が人間のアホぶりを褒める、という体裁で、人間のあらゆる行動を俎上に乗せた。ラブレーはエラスムスの一冊を圧縮し、「紋章」化して作中に埋めこんだわけである。

人間の宿命としての痴愚は、ルネサンス期の一大テーマであった。一度ついたら動かせない鼻も、幾分かは宿命の様相を帯びるが、わざわざブラゾン化して一章を割くにあたわず、がラブレー作品の出した答えだった。異常成長した派手な鼻でも、せいぜいが「蒸留器の抽出口みたいで、玉虫色のキンキラキンのおできうじゃうじゃ、赤に紫に底光り、エナメル風にテカり、血管浮き出して吹き出物ブツブツ」[19]だった。

これは、当時の鼻が格好の風刺の対象だったことと相反しない。酔っ払いの赤い鼻。おできだらけの梅毒の鼻。酒と性の放埒がもたらす陽気なグロテスクは、放埒の主体が聖職者である場合、社会風刺の様相を帯びる。

ラブレー流を受け継いだ後発部隊の作品に『教皇料理のキリスト教的風刺詩』がある。1560年に作者名ぬきでジュネーヴで出版された。最近の版はカルヴァンの後継者テオドール・ド・ベーズ作と推定している。「教皇の饗宴」など分かりやすい当てこすり満載で、全8篇のうち第7篇に「ピエール・リゼ師の詠歌、今は亡き自らの鼻によせる」が収められている。

ピエール先生びっくりだ
おできだらけのその鼻が
悪運尽きて落ちそうだ
困ったことに梅毒で。
頭きちゃった先生は、
大杯取って飲み干して、(略)
ゲップと詠った嘆き節。
「ああ哀れな鼻ちゃんお別れだ、
わしはこの世に残される！
酒を飲むのが使命の鼻よ
わしの誇りのハッピー鼻よ（略）
鼻よ、眞の枢機卿鼻よ、
わが時禱書、わが文法書よ、
ソルボンヌの鑑で、
邪教異端に縁は無し、
われらが教会の眞の礎、(略)[20]

リゼ師が嘆き終わって鼻が落ちる。落ちた鼻は聖遺物箱に納められ、墓碑銘が刻まれて終わる。作者の意図は充分に表現されているが、予定調和の微温な印象が残る。ブラゾンで褒めようとすると滑稽に傾く鼻が、反ブラゾン的風刺ではむしろこの程度なのである。

扱いの難しい鼻に、型どおりの風刺よりも個性的な役割を与えた例はパスカル以外にないのか。意外やパスカルからほど遠からぬ地点に、その鼻はそびえ立っていた。

3. シラノの2つの鼻

大鼻のシラノは恋する剣豪。エドモン・ロスタン（1868年－1918年）の韻文劇『シラノ・ド・ベルジュラック』（1897年初演）が広めたイメージ

だが、主人公と実在のモデルには当然距離がある。確認する作業は、鼻の文学的可能性をさらにひろげる作業でもある。

実際のサヴィニヤン・シラノ・ド・ベルジュラック（1619年－1655年）は、剣豪で恋もした（ホモセクシュアル、梅毒）が、同時にイエズス会に睨まれる過激自由思想家で哲学、科学、劇作、小説と多彩だった。

死後出版の小説は、月と太陽、両世界への旅行記の体裁を取り、SFの始祖とも言われている。『月世界諸国』（1657年刊行）によると、月の住人は彼らの大鼻を日時計に用いる。鼻の影を文字盤がわりの歯に映して時間を知らせるのである。驚く主人公に、月人は全員が大鼻である理由を明かす。

> （略）女がお産をするなり、産婆が赤ちゃんを神学院院長のもとへ届けます。ちょうど一年経つと、専門家が集められ、赤ちゃんの鼻が区長さんの持つある一定の尺度より短いとなると、この子は低短鼻とみなされ、神官たちに任され去勢されます。（略）
> 大鼻はわが家の門にかけた看板みたいなもので、「ここに住むは才気ある、慎重な、礼を知る、愛想のよい、心の広い自由人なり」とあるわけです。小鼻のほうは正反対の諸々の悪徳のぼろ看板ですな。[21]

またしても「短い」（court）鼻の受難である。「低短鼻」と訳した原語は « camus » で獅子鼻、ぺちゃ鼻をあらわす。持ち主が女ならクレオパトラでも非力になり、男なら去勢を免れない、とはあんまりである。信仰の人パスカルと、リベルタンのシラノ。同時代の正反対と見える2人が、まさに鼻突き合わせることになった。

下世話なレベルでは、2人の肖像画を見比べて納得できる。シラノはたしかに顔面積に鼻の占める比率が高い。しかしパスカルも、大して負けているとは思われない。立派な、あるいは立派すぎる鼻は、無意識のうちに貧弱な鼻とは一線を画そうとするのだろうか。

文学のレベルでは、パスカルの場合、鼻の長短は空虚な物質世界の象徴だった。シラノの鼻は単にコミカルな細部であり、作中から実世界へ送っ

たウィンクのようなものだが、背後には観相学の伝統が控えている。版本の注によると、シラノが依拠したのはデッラ・ポルタの『観相術』(1586年初版)である。当時の博物誌らしいやり方で、アリストテレス以来の諸説を列記すると同時に、人相と動物の相がイラスト入りで比較検討されている。鼻に関しては、大きな鼻は善良さのしるしで、小さな鼻より絶対に良い、など諸説が紹介されている。[22]

パスカル同様、近代科学の最先端をめざしたシラノだが、その教養はルネサンスを――換言すれば科学と似非科学の間の手探りを――継承していたと分かる。予想外に複雑な背景を背負ったシラノの鼻が、19世紀に劇のモデルとなってみると、どのような変身を遂げたか。劇中のシラノが、自分の大鼻を誇らかに「ブラゾン」化する台詞は数十行に及ぶ。

(略)
[鼻について] 調子を変えていろいろ言えるぞ。たとえばこんな具合だ。
挑発するなら「あーん、兄ちゃん、俺がそんな鼻なら、
自分で即座にちょん切っちゃうぜ」
仲良し風「おやお鼻がグラスに浸かりますよ。
飲むならジョッキにしたほうが」
描写的「まるで岩だ!　峯だ!　岬だ!
いや岬どころか。これは半島だ!
(略)
識者ぶって「そんな動物、出てきますよ、アリストファネスにね
海馬エレファントらくだ、っていう。他にないね、
額の下にそんなに骨と肉が盛り上がってるのは! (略)[23]

シラノはまさに鼻高々、16世紀の「鼻のブラゾン」が成しえなかったほど完璧に鼻を賛美してみせる。彼の鼻は飲兵衛や梅毒の病んだ鼻と異なり、健康そのものである。しかしブラゾン化した台詞の一歩外には、別の

現実がシラノを待ちうけている。

この鼻では愛するロクサーヌにモテない、という事実の前には、さすがのシラノも涙を隠せない。慰める友人に彼は言う。「俺はクレオパトラを愛しているが、この俺がカエサルに見えるか？」[24]と。

ここに至り、パスカルの構図は見事に逆転した。カエサルがシラノの大鼻なら、地球の顔はすっかり変わっていたかもしれないのだ。それとも権力さえあれば、鼻が「海馬エレファントらくだ」でもクレオパトラはなびいたのか。パスカルに答えがないのは、先述したとおり、彼が男性側から、男が「何だか分からないもの」に翻弄される姿を一般化したためである。

意外な人物が、すでにパスカルの代わりに答えてくれている。ロートレアモン伯爵ことイジドール・デュカス（1846年－1870年）。シュルレアリズムの先駆とみなされるほどのイメージの奔流も、堰き止めて凝視すれば骨太の一行に突きあたる。『ポエジーⅡ』（1870年）には名句のパロディが散りばめられており、ナンセンスを狙ったと評されるが、なかなかどうして、元となる箴言よりも理にかなっていたりする。

> クレオパトラの了見がもう少し偏狭でなかったら、地球の顔は変わっていただろう。彼女の鼻がそれでもっと長くなりはしなかったろうが。[25]

「偏狭」の原語はむろん « court » である。彼女が美のオーラを発散したのも、野心で権力者に取り入ったのも、鼻より性格の問題、と改めて確認しておく。

ではロクサーヌの「了見」はどうなのか。彼女は最初、美男のクリスチャンに惹かれる。そうと知ってもシラノは、恋敵の美に自分の才気で対抗しようとはしなかった。つまり女にとって男は顔、という「了見」を自ら設定したのである。

美男のクリスチャンには知性が、利発なシラノには美が欠けている。それなら君の美しい肉体を「貸してくれ」[26]とシラノはクリスチャンに迫る。

シラノの発想は、人造美女に精神を吹き込もうとする『未来のイヴ』（ヴィリエ・ド・リラダン作、1886年）との同時代性を感じさせるとともに、現代のサイボーグ志向に通じるものがある。結局ロクサーヌが愛したのはシラノの精神だった、という結末よりも、シラノがクリスチャンの着ぐるみをまとうプロセスのほうが、今となっては迫力がある。

シラノとクリスチャンとロクサーヌの場合、「何だか分からないもの」に惑わされたのは誰だろう。シラノに自分を乗っ取られたクリスチャンも、男2人で演じる幻影に惑わされたロクサーヌも、シラノに振り回されている。シラノ自身は、自分の鼻に振り回されていた。

相手の鼻ではなく、自分の鼻に自分で振り回されるとは、シラノは鼻のつもりで自分をぶら下げていたことになる。自意識いや鼻意識過剰。「自我は鼻もちならない」[27]、パスカルの別の箴言が降ってくる。

物質と精神の、自我と他者の、幻想と現実の交差点、鼻。交差する瞬間を描いた例を、最後に挙げる。マルセル・プルースト（1871年－1922年）の『失われた時を求めて』は、冒頭の紅茶に浸したマドレーヌのシーンがあまりにも有名なため、香りから記憶を呼び覚ますことが「プルースト効果」と呼ばれたりもする。ページの上に五感を総動員した彼は、嗅覚のみならず、鼻そのものについて、印象深い一節を残している。幼い主人公は、近隣の館に住むゲルマント侯爵夫人について、大人たちの話をもとに深い憧れを抱いていた。ある日の教会で、ついに彼は実物の夫人を目にするのだが……

> （略）礼拝堂の中に金髪の婦人が座っているのが見えた。立派な鼻、青くて鋭い目、ふわふわのスカーフは薄紫の絹だ、なめらかで真新しくて艶がある、あと鼻の脇に小さなニキビがひとつ。[28]

さらに夫人は赤ら顔だった。勝手に伝説の人物を作り上げていたのが、自分と同じ生身の人間と分かり、主人公は幻滅する。それでも想像力を盾に、必死で現実と闘い、最終的には夢想とその場の情景とで折り合いをつ

ける。

ゲルマント侯爵夫人の鼻。その脇にニキビさえ出来ていなければ……と言いたいところだが、プルーストの主人公は鼻ニキビを超越し、「何だか分からないもの」の堆積を自らのカテドラルとして構築していくのである。

鼻について長々と書いた。当論がもう少し短ければ、この『藝文研究』の顔は変わっていたかもしれない。ハナはだ失礼、と筆を置く。

註

1　塩川徹也『パスカル考』、岩波書店、2003年、p. 30.

2　Pascal, *Œuvres complètes II*, édition établie par Michel Le Guern, Paris, Gallimard, 2000, p. 614.　論中の訳文はプルタルコスを除いて全て拙訳。

3　*Ibid.*, p. 675.

4　田辺保『クレオパトラの鼻―パスカルの恋愛論―』、白水社、1980年、p. 4.「何だか分からないもの」という台詞が登場するのは『メデ』と『ロドギュンヌ』の二作であり、エジプトの女王とは直接の関係はない。

5　Pascal, *op. cit.*, p. 674–675. この断章の草稿あるいは関連稿と見られる断章が二つ存在するが当論では扱わない。前田陽一「パスカル『パンセ』注解　第二」（岩波書店、1985年、p. 148–153）参照のこと。

6　田辺保、上掲書、p. 3–57.

7　河野与一訳『プルターク英雄伝（十一）』、「アントーニウス」、岩波文庫、1956年、p. 100.　訳文の旧かなおよび固有名詞表記（クレオパトラー、アントーニウス）は改めた。

8　例えば15世紀、ヴィヨンが「去年の雪　いまは何処」のバラッドで詠った伝説の美女たちのなかにはクレオパトラは見当たらない。

9　直接の源泉はルカヌスであり、プルタルコスの影響も強い。

10　Corneille , « Examen » de « La Mort de Pompée » dans *Œuvres complètes I*, édition établie par Georges Couton, Paris, Gallimard, 1980, p. 1077.

11　*Ibid.*, p. 1092.

12　Thomas Sébillet, « Art poétique français »(1548) dans *Traités de poétique et de rhétorique de la Renaissance*, édition établie par Francis Goyet, Paris, Le livre de Poche, 1990, p. 131–134.

13　*Blasons anatomiques du corps féminin publiés sur l'édition de 1550*, Paris, E. Sansot, 1907, p. 34–36.

14　ただし、かぐわしい鼻息にも源泉はある。饗庭孝男はブラゾンの起源を聖書の「雅歌」とし、「なんじの鼻の息は林檎のごとく匂わん」を引いている（饗庭孝男『幻想の伝統―世紀末と象徴主義』、筑摩書房、1988年、p. 235.

15　『渡辺一夫著作集Ⅰ　ラブレー雑考　上巻』、「ラブレーの鼻について」、筑摩書房、1970年、p. 178–192.

16　Rabelais , *Œuvres complètes*, édition établie par Mireille Huchon, Paris, Gallimard, 1994, p. 236.

17　*Ibid.*, p. 470–473.

18　レトリックが法廷弁論、議会弁論、演説的弁論に分かれるのはアリストテレス以来の伝統である。アリストテレス、戸塚七郎訳、『弁論術』、岩波文庫、1992年.

19　Rabelais , *op. cit.*, p. 219.『第二の書　パンタグリュエル』（1532年）第一章より。

20　[Théodore de Bèze], *Satyres chrestiennes de la cuisine papale*, édition établie par Charles-Antoine Chamay, Genève, Droz, 2005, p. 162–167. 163ページの注672参照。同様の鼻がらみの風刺詩は少なくない。中でも『今風の鼻の解剖』（作者、出版年不詳）は皮膚、筋、骨まで「解剖」して見せる本格派である。

21　Cyrano de Bergerac, *Œuvres complètes I*, édition établie par Madeleine Alcover, Paris, Champion, 2000, p. 141–142.

22　赤木昭三訳『日月両世界旅行記』（岩波書店、2005年）訳注（p. 422）では1612年版が引かれている。当論ではイタリア語訳を参照した（Giovanbattista Della Porta, *Della fisionomia dell'huomo*, Christoforo Tomasini, 1644, p. 84）。デッラ・ポルタの主著である『自然魔術』（1558年）には錬金術と科学的実験が共存する。

23　Edmond Rostand, *Cyrano de Bergerac*, édition établie par Jacques Truchet, Paris, Collection de l'Imprimerie nationale, 1983, p. 102–103.

24　*Ibid.*, p. 120.

25　Isidore Ducasse Comte de Lautréamont, *Œuvres complètes*, édition établie par Hubert Juin, Paris, Gallimard, 1973, p. 301.

26　Edmond Rostand, *op. cit.*, p. 181.

27　Pascal, *op. cit.*, p. 763.　芥川龍之介『鼻』もこのケースと思われる。

28　Marcel Proust, « Du côté de chez Swann » dans *A la recherche du temps perdu I*, édition établie par Jean-Yves Tadié, Paris, Gallimard, 1987, p. 172.

Special thanks to Miho Koiké.